

複合文化学通信

第 6 号

(2007 年 2 月 25 日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘)

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしまおう！」

まず、青山 瑠妙〔あおやま るみ〕先生です。

私の専門は、日本、中国、そしてアジアの国際関係です。

日本と中国を中心に、アジアの国際関係を複合的な視点から研究しています。

かたいテーマとしては、たとえば、東アジア共同体の可能性や国連問題など。

ソフトなテーマは、たとえば、

韓流や華流、日本マンガフィーバーといった文化融合ははたして純粋に自然発生的なものなのか？
インターネットの普及によって世界がフラットになって、人々の相互理解は深まっているのか？ などです。

ハードな部分とソフトな部分の両面から、日本や中国、
そしてアジアの国際関係を複合的にみていくように心がけています。

つづいて、丸川 誠司〔まるかわ せいじ〕先生です。

私は主に詩と、関連する美術の分野を研究対象にしてきました。

修士課程では 20 世紀最大級のヨーロッパの前衛芸術の運動であるシュルレアリスムの詩人を

取り上げましたが、その後は、続く戦後世代の詩人の研究に取り組んできました。

シュルレアリスムの政治的理想が戦争のなかで無効になるのを目前にし、

深い幻滅と挫折を経験した詩人たちに共感したためです。

もともと美術に深い関心を抱いていたため、シュルレアリスム等での詩と美術の接近は、
研究範囲を深めるのに最適でした。この時期のヨーロッパの芸術はジャンルも国境も横断しています。

また、詩の翻訳の問題から、国境を越えた伝達である翻訳について考える翻訳論にも入りました。

さて、私が研究している詩人たちはミロやジャコメティ等の芸術家と親交がありました。

もうこのような大芸術家はいません。なぜでしょう ... ?

さらに、岡田 浩平〔おかだ こうへい〕先生です。

ドイツ語が使われる主な国には、ドイツ、オーストリア、スイスがあります。
この三つのドイツ語圏の共通点といえば、キレイな街並みをつくっておたがい気持ちよく暮らそうと
努めていることです。食文化よりも、住環境に重きをおく生活スタイルと言ってよいでしょう。
この生活感覚が基になってゴミ処理技術から太陽光発電・風力発電など、
「地球に優しい暮らし」をする点では、ドイツ語圏三国は世界の先端を行く国になっています。
そんな面をドイツ語履修の学生諸君に知って貰える授業を心がけています。

なお、私の専門は、ヒトラーがドイツを支配した時代に、
外国に難を逃れて異国で活躍した人たちの作品—これを「ドイツ亡命文学」といいます—の研究です。
この分野の人物や歴史の紹介も、つとめて行なっています。

最後に、すでに紹介した野谷 文昭〔のや ふみあき〕先生の経歴と近況をお伝えします。

東京外国語大学の学部ではアンデスのインディオの復権をめざす小説をテーマに卒論を、
大学院ではチリのノーベル賞詩人ネルーダで修論を書きました。
前者はマイノリティへの関心として今につながり、
後者の成果は『マチュピチュの頂』の翻訳と解説に結実していると思います。
一方、1980年代にはガルシア＝マルケスの『予告された殺人の記録』やブイグの『蜘蛛女のキス』
など小説の翻訳をさかんに手がけ、作品論や作家論を書くいっぽう、中上健次や村上春樹、
村上龍など日本の作家を「南」の視点で論じることも試みました。
さらに、ブイグへの関心もあって映画に接近し、字幕翻訳や批評を手掛けたりもしています。
また 1999 年にボルヘス生誕 100 年記念シンポジウムを開いたことをきっかけに研究者や作家、
アーティストからなる会を作り、現会長を務めています。
文化が生きていることを実感できるからです。

そんな野谷先生の近況です。

アルゼンチンのディアスポラ作家コルタサル の短篇集『いとしのグレンダ』の翻訳が
もう少しで終わります。作品の多くをパリで書いた彼は幻想小説が得意ですが、
この短篇集では日常の暴力や恐怖を間接的に浮かび上がらせています。
一方、「人の移動と文化変容」というテーマの下に、キューバのディアスポラ作家や文化人の国外での
活動を扱った論文を、インタビューを交え、具体的な形にするところです。
そんなおり、キューバの作家セネル・パスから新作小説の発表会をマドリードでやるという案内が
メールで届きました。ディアスポラではありませんが国外でも活動し、新作のタイトルはビートルズの
曲を踏まえた『イン・ザ・スカイ・ウイズ・ダイヤモンド』。複合文化的な作品のようで楽しみです。

卒業論文って、どんな内容？

つづいて、以下には、1月に提出された卒業論文のいくつかを、担当の先生から紹介してもらいます。

村上 公一〔むらかみ きみかず〕先生より

今年担当した卒業論文は、本通信第4号で紹介した珍田礼一郎くんの「適正化規定廃止と変容しつつある理美容文化」の他に5本。

韓流体験が中年女性をどのように変えていったのかをアンケート調査を踏まえて分析した「進化する韓流—中年女性はなぜ韓流にはまり続けるのか—」、外来スポーツであるサッカーをアメリカはどう受容してきたかを考察した「アメリカでサッカーの人氣がないのはなぜか?」、映画『羅生門』のアメリカと日本での受容のされ方の違いをめぐる「映画『羅生門』に描かれる敗戦直後の日本の姿」、音楽配信という新たな流通システムによってもたらされる既存メディアの変容について「音楽配信ビジネスがパッケージ商品に与える影響」、「言語の自主選択権」の名を借りた、少数民族地域における国家通用語としての中国語（漢語）普及政策について丹念に論証した「中華人民共和国の言語政策と『言語の自主選択権』—民族自治区域における民族言語文字業務条例を通して—」。

内容はじつにさまざまで、一見、おたがいに何の関連ももたないように見えますが、これらの研究には「文化の越境現象についての探究」という大きなテーマが見え隠れしています。

後藤 雄介〔ごとう ゆうすけ〕先生より

今年度の卒業研究は計7本。

タイトルを並べてみれば、「プロ野球ビジネスへの提言」、「在日『新世代』作家 金城一紀」、「Jポップにおける『桜』による日本表象」、「プエルトリコ・アイデンティティをめぐる考察」、「『学力低下』の論じられ方」、「問われる『カタカナ語』」、「ご近所の『ガイジン』さん」と、じつに多種多様。これはいったいなんのゼミ？ あなたはラテンアメリカ研究者じゃなかったっけ？ と、どうか問うなかれ。これが現「学際コース」の、そして来る新学科の特徴なのです。

私が与えた「通底音」は、とにかくさまざまな「境界線」のあり方を問い直すこと。それに耳を傾けて学生は、たとえば、「一口に『学力低下』論者といってもいろんな立場や意図があるじゃない」、「『ガイジン』さんと一緒にしてしまっただけは地域コミュニティでの日本人との相互関係が見えてこないぞ」と、それぞれに楽器を選んで演奏に趣向を凝らし、出来上がったのがこの7本が奏でる壮大(?)な「シンフォニー」という次第。唯一ラテンアメリカ的テーマであるプエルトリコが、なんだか「不協和音」みたいなのが気にならないわけでもないけれど(笑)。

とにかく、卒業研究をきっちり仕上げてきた7名の諸君、お疲れさまでした。

渡辺 芳敬〔わたなべ よしたか〕先生より

今年度担当した卒業研究は以下の2本です。

「忠臣蔵幻想の謎——『仮名手本忠臣蔵』におけるお軽と勘平の意義を探る——」

「Actor Training “Stanislavski’s System”」(英語)

奇しくも演劇論がふたつならんでしまいましたが(教員の芝居好きの影響? ではないと思いますが)、演劇こそ、言語と身体、視覚と聴覚、役者と観客等々の往還をダイレクトに見せてくれるミセモノです。

前者は、文楽・歌舞伎の脚本『仮名手本忠臣蔵』に基づき、「お軽・勘平」の恋模様・人間模様を分析したもの。作品全体への目配りの中で、両者がいかに仮名手本の真のヒーロー・ヒロインとなりえているかを語ってくれました。手堅くも刺激的な論文です。

後者は、システムで有名な演出家スタニスラフスキーの演出論・演技論をまとめたもの。有名なわりには、文献が整備されていない対象と格闘してくれました。実践同様、理論も日々動いていることを実感させてくれる論文。なにをやってもいい。でも、論文にしてほしい。これがわたしのゼミ(「傾く者」集団)の原則です。

今回強く感じたことは、卒論研究が時間に正比例するとはかぎりませんが、時間との勝負であることはたしか。とすれば、指導教員に求められているのは、いかに産婆役、編集者に徹するかということかもしれません。

原 克〔はら かつみ〕先生より

担当した卒業論文の題目は以下の通りです。

「疾走するトリックスター ― オートバイが語る現代の神話」

「東京「郊外」としての多摩地区

― 「東京のふるさとへいっしょい」

「商品としての不登校 ― 朝日新聞の不登校関連記事の分析」

「ファッションという名の囚人服 ― 複製技術時代を告げるミシン」

「ウルトラマンマックスの示す現代社会の精神

― テレビシリーズ「ウルトラマンマックス」と

「ウルトラマン」の表象分析」

「ウィキペディアに見る現代社会の情報の扱い方

― インターネットにおける集合知の可能性を考える」

「400 円で手に入れる「私らしい」私

― プリクラから見る現代人の自己固執傾向」

「1960 年代後半における SF の変容

― 「宇宙開拓の神話」から「インナー・スペース」へ」

ロラン・バルトは「物ほど神秘的なものはない」と言いました。物とは物であって、同時に物以上のなにかなのです。ボクらの暮らしでいえば、自動車・通学電車・テレビ・パンツ・PC・ケイタイ等々といった日々の日用品や新製品たちが、もっとも身近な「物」なのです。そうした物たちは、機械的に機能をはたす「物」でありながら、同時にさまざまなメッセージをボクらに送りどけてきます。「カッコイイ」車だとか、「便利な」ケイタイだとか、「ダサイ」パンツだとか。物とは物でありつつ、なんらかのメッセージを送信する発信機でもあるのです。そして、そこから発信されるメッセージこそ、現代文化・サブカルチャーの本体を構成するなにかであるのです。

ボクらのゼミは現代文化を研究しますが、分析の出発点はこうした「物たち」をじっくり観察することに置かれています。ボクが研究指導した卒業論文も、そうした意味で、すべて「身近な物たち」をテーマとしたものばかりです。オートバイ・通学電車・新聞紙・ミシン・テレビ・インターネット・プリクラ等々、いずれの卒業論文も、物を物として観察することから始めて、最終的には、そこから発信されてくる価値観や美学や倫理観といったメッセージを分析することに成功しています。

実りある学問とは、未知の知識を身につけることではありません。だれもが知っていて、なんの変哲もない身近な物や出来事に潜んでいる、だれも気づかない内的構造を明らかにすることです。これこそ、真の学問の姿な

のです。その意味で、これらの卒業論文はいずれも実りある学問の名に値するものです。

福田 育弘〔ふくだ いくひろ〕先生より

わたしのところには、飲食をテーマにかなり学際的な研究が 5 本だされました。どれも卒論の水準としては、かなり質の高いものでした。

1. 「飲食が創り上げる私」

2. 「飲食がつくる時空間 ― 演出装置としての酒―」

3. 「女の花園・スウィーツの誘惑

～甘い世界の甘くない戦略競争～」

4. 「現代のストレス社会における依存症候群」

5. 「子どもメディアと子どもの食」

以上の 5 論文です。

1 は、飲食とアイデンティティの問題、とくに近現代におけるアイデンティティを追求したもの、2 は、飲食という行為がつくりだす特殊な時間と空間を分析したもので、ともに抽象的で哲学的な議論をふくみながら、具体例をあげて分析していて、とてもわかりやすい論文に仕上がっています。

3 は、飲食物であると同時に嗜好品的な性格ももつスイーツに焦点をあて、女性が消費対象から消費主体になっていく過程を、昨今の IT による情報化の影響もふくめて緻密に分析しており、ジェンダー論的にも刺激的です。

4 は、アルコールやコーヒー・チョコレートなどの嗜好品や買い物などの嗜好的行動が、現代のストレス社会で依存的な形で消費されたり、実践されたりしていることを分析したもので、データも豊富でわかりやすい論文です。

5 は、童話や絵本、マンガやアニメといった子どもメディアのなかで、どのように飲食行為が描かれてきたかを、時代背景の変遷とともに検討したもので、図版も多く、とても面白い論文です。

いずれも、飲食という行為を歴史学や社会学、都市論や心理学等をもちいて多面的に分析していて、あらためて「飲食」が学際的で領域横断的な分野であることをよく示しています。

神尾 達之〔かみお たつゆき〕 先生より

私が指導した学生の卒業研究を紹介します。

「ショー人とショク人 ―二大アニメブランドD・Gにおけるスタンス比較―」は、ディズニーとジブリを比較・対照することで、高度資本主義社会におけるサブカルチャーの現在形と未来形を描いてくれた楽しい論文です。

「現代のナルシス神話」は、自分自身を映す／写す／移すメディアとしての肖像の歴史を考察したものです。鏡から説きおこし、肖像画、初期の写真、デジタル写真、修整写真までを射程におさめています。著者によれば、水面に映った自分の姿に恋をしたナルシスは、自分を肯定するさまざまなメディアを発明してきましたが、他者から日々「イエス」が送信されてくる mixi もまた自己肯定のメディアの一つとみなすことができます。

「IT makes “新体/身体” 表象―イメージネーション・テクノロジーとしてのITが始まる―」は、ITを「インフォメーション・テクノロジー」としてではなく、「イメージネーション・テクノロジー」としてとらえる意欲的かつ先進的な論文です。ひょっとすると、数年後には、この「イメージネーション・テクノロジー」がITの新しい読み方として普及しているかもしれません。

「メディアミックス」や「マルチメディア」とは異なる最新のメディア戦略を紹介してくれた「クロスメディア文化論」は、「クロスメディア」の紹介にとどまらず、消費者が世界を知覚する仕方がこれによって変容する可能性があることを予示してくれます。

学際コースには新進の書家もいます。「進化する「Sho」のスタイル ―書が演出する新しい世界―」は、書の歴史・その国際的な広がり・ギャル文字などの出現を射程におさめた論文ですが、著者は自分が没入している営みにうまく距離を保っていました。

「メディアの申し子／融解の触媒 ―ポップミュージックのディスクール分析―」は、複製メディアを最大限に利用してきたポップミュージックが、線条性・カテゴ

イズ・主体を融解し、価値判断の境界・聴衆／作者の境界・ライブ文化とディスク文化の境界を無効にしてきたプロセスを分析しています。

「仕掛けられた遊び ―今の遊びを考える―」は、市販玩具、テレビゲーム、テーマパークを個別にこまやかに分析したあと、今後はそれらを区別する境界線が消えていくのではないかと予想します。音楽でも遊びでもボーダーレス化が進んでいるようです。

「フリーター問題とキャリア教育について」は、高校の教員として働くことが決まった著者が、フリーターになるかもしれないという自分の不安感を対象化しながら、同時に、自分が教えることになる若者の進路選択について考察した論文です。

この論文と同じように、「マイノリティが強者になる時代」も、やはり著者が日頃抱いている問題意識から出発した論文で、豊かな時代に生きる若者たちにじわじわと拡がる「ノンブア・コンプレックス」が「ネガティブ自慢」という形をとることを、するどく指摘しています。

「おしゃれマンガは好きですか？ ―現代の欲望縮小図―」は、『NANA』や『ジェリー・イン・ザ・メリーゴーラウンド』などのマンガに、「おしゃれマンガ」というジャンル名を与えようとする意欲的な論文です。

20世紀末には人間が自分の身体や身体イメージを変えることが容易になってきましたが、「自己改造 ―自分自身に対する身体操作―」は、この変化を、生前（自分に属する胎児）・生存中（自分自身）・死後（自分自身のイメージ）に分けて考察した論文です。

「脳化社会とスポーツ ―システム化された身体運動―」は、身体の純粋な運動であると考えられるスポーツにも、いわゆる「脳化」が波及していることを、ルール、トレーニング、メディア、ファッションという四つの切り口から指摘してくれました。

どの卒業研究も、「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておもう！」という複合文化学科のスローガンが実現したものだったような気がします。

「こんな科目、こんな内容」

今回は3年から4年にかけて履修する《演習》科目である「**複合文化学演習**」を紹介します。

「複合文化学演習1～9」は、半期2単位の科目ですが、便宜上半期になっているだけで、実際の授業は通年単位で行われます。

これはみなさんの発表と議論とによって構成されるゼミ形式の授業です。また、卒業論文にもつながっていく、自分の研究をまとめていく場でもあります。

普通、多くの大学では、3年4年で演習が1科目必修です。場合によっては、4年次のみ必修という大学や学部・学科もあります。

複合文化学科では、3年で「複合文化学演習」を2科目（便宜上前期と後期に分かれています）、4年で1科目が必修となっています。

なぜ、こんなに演習〔ゼミ〕に重きをおくのでしょうか。それは、もともと複合文化学が、領域横断的なテーマを多面的に分析する学問であるからです。つまり、みなさんに多彩なテーマと多様な分析事例に出会ってもらい、その方法論や思考法を身につけてほしいからです。

しかも、どの演習も2人（場合によっては3人）の教員が演習を担当します。つまり、合同演習なのです。それぞれペアになる教員の演習は同じ時間帯に設定されています（たとえば、月の4・5限とか水の5・6限）。担当の教員によって、毎合同だったり、何回か合同だったりしますが、基本は2人の教員による共同運営で行われる演習なのです。

これも、複合文化学科ならではの特質です。というのも、大学の教員はだれもが自分の専門をもっているため、その領域だけに閉じてもりがちだからです。まず、多元性と多面性を保証するため、教員同士が交流しようというわけです。

そしてなによりも、こうした合同演習の形態をとるのは、みなさんになるべく多くの教員の実践にふれてもらいたいからです。

つまり、複合文化学科では、授業の形態も複合的なのです。

ときに、授業で教員同士が議論をたたかわせるかもしれません。知識には「これは正しい」とか「これは間違っている」ということは言いえるかもしれませんが、文化現象の分析には、ひとつの真理というものはない場合の方が多いのです。より考えを深めるためには、より説得力のある結論にいたるためには、狭い専門を越えた教員同士の議論も必要なのです。

複合文化学においては、「先生が答えを知っている」ということはありません。これがこれまでの勉強と大きく違うところです。たとえ、「先生」にそれなりの答えがあったとしても、「先生が知っている答え」も、数ある答えのひとつにすぎません。より説得力のある、より適切な答えをもとめて、みなさん同士が、みなさんと教員が、そして教員同士が議論していく場こそ、「複合文化学演習」なのです。

複合文化学科の前身となった学際コースの「現代文化演習」「現代社会演習」では、この合同演習の形態がすでに採られています。

以下に、2人の教員（神尾・福田）によって毎合同で行われた「現代文化演習」に1年間参加した、笹川真理子さんの意見を紹介しておきます（笹川真理子さんは、部分的な合同開催だった昨年度の演習にも参加していました）。

ゼミは自分たちの研究の過程・成果を発表し、それについて議論をする場です。

私たちのゼミは2つのゼミが合同で行われているので、1つのゼミの時間に2つの専門分野を学ぶことができます。

私は飲食表象が専門のゼミにいますが、そのゼミの時間にもう1つのゼミの専門分野である身体表象についても学ぶことができます。まさに、「一石二鳥」です。

また、自分の発表に対する違う専門分野のゼミ生からの意見はとても新鮮で自分の研究に新たな視点が加わります。そして、2人の教授の白熱した議論も見物です。

2つのゼミのゼミ生、教授陣がおたがいを助け合い、ときには意見を戦わせることで切磋琢磨していける環境が、ここにはあります。

自分の研究を進めるとき、自分ひとりでできることはとても小さなことかもしれません。でも、ゼミにはたくさんの仲間がいます。その仲間の脳みそを拝借することができたら、きっと想像もつかないような大きな結果が生まれるはずです。

教育学部 学際コース 4年 笹川真理子

《裸足の 1500 マイル》 2002 年 オーストラリア

フィリップ・ノイス監督

出演：エヴァーリン・サンピ、ローラ・モナガン、ティアナ・サンズベリー他

前号で紹介された《モーターサイクル・ダイアリーズ》と同じように、今回紹介する《裸足の 1500 マイル》も、いわゆる「ロード・ムービー」というジャンルに属する映画です。「ロード・ムービー」というのは、主人公（たち）が旅をする途上でさまざまな出来事に出くわすというパターンをとる映画をさします。

ほとんどのロード・ムービーでは、主人公（たち）はオートバイや自動車などの乗り物を利用します。《モーターサイクル・ダイアリーズ》では、タイトルのなかに乗り物をあらわす言葉が含まれていますね。

《裸足の 1500 マイル》もタイトルに移動手段が表示されています。「裸足」です。三人の少女が、乗り物を使わないで、母が待つふるさとまで 2400 キロメートルを歩いて帰るというお話です。こんな長距離を裸足で歩いて帰るだけでもたいへんですが、実は彼女たちは収容所から脱走してきたのです。追っ手をのがれての逃避行というわけです。

三人の少女は何か悪いことをしたのか。そうではありません。オーストラリア政府は 1930 年代、先住民のアボリジニと白人との間に生まれた混血児たちを、家族から引き離し、白人社会に適応させようとしていました。白人の目から見れば、それは無知な混血児たちを「保護」し「教育」するための政策だったのです。三人の少女たちは、白人のように食べ、白人のように話し、白人のように書くことを学ぶことになりました。白人たちはおそらく善意から「教育」したのでしょう。しかし、少女たちは「教育」の強制所から逃亡することを選んだのです。

複合文化学科は「教育」学部には属していますが、「教育」を（Fence の？）外側からながめることのできる学科です。

最後に、この映画を見てくださる方が、映画を楽しむだけでなく、複合文化学科での勉強につなげる三つの補助線をうっすらと引いておきます。

(1) この映画の原題である "Rabbit-proof Fence" というのは、うさぎが農場に入らないように張りめぐらされたフェンスのことです。Fence は何を象徴しているのでしょうか？

(2) 《モーターサイクル・ダイアリーズ》と《裸足の 1500 マイル》をつづけて見て、ロード・ムービーに興味を持たれた方は、ロード・ムービーの原型ともいえる《イージーライダー》をチェックし、そのあとで、《幸せの黄色いハンカチ》や《ストレート・ストーリー》や《パリ・テキサス》で涙を流し、最後にはアンチ・ロード・ムービーともいえる《ウィークエンド》や《マルホランド・ドライブ》で頭をひねってみてください。黒沢清は「すべての映画はホラー映画だ」と言ったそうですが、「すべての映画はロード・ムービーだ」という命題を証明するための卒論なんて、カッコよくないですか？

(3) 「まじめな」卒論を書きたい方は、《裸足の 1500 マイル》を『文明の衝突』という角度から分析するのもいいかもしれません。その場合は、『エイリアン』や『猿の惑星』も観なければなりませんね。(K)

第 7 号は 3 月 5 日発行予定です。

背景画像：ロマネ・コンティ Romanée-Conti の畑、©2007 I. Fukuda